序文

2010年4月、龍谷大学はアジア仏教文化研究センターを設立し、アジア各地に展開した多様な仏教の歴史と現状を調査・研究し、仏教の現代的意味を明らかにすることを目指している。

21世紀は、2001年9月11日の「同時多発テロ」によって悲劇的な幕開けをした。その結果、合衆国はアフガニスタンとイラクで終わりの見えない戦争を行うことになった。この現状をハンチントンの「文明の衝突」の図式に従って、キリスト教文明圏とイスラム教文明圏の争いと見て、問題の根源を両宗教間の対立の歴史に帰するのが、当時も今も一般的な理解であるだろう。もちろん、事態はそれほど単純ではないこともしばしば指摘されるところであるが、いま宗教の社会的責任が問われていることは否定できない。

9.11 以降、日本では、一般に宗教、特に一神教に対する恐怖感や嫌悪感が増加したことはあっても、日本人、あるいは、仏教徒の視点から、9.11 に関する説得力のある意見が表明されたとは寡聞にして知らない。アフガニスタンやイラクの戦争に日本がどうかかわるべきかという議論はされても、キリスト教圏でもイスラム教圏でもない日本が何らかの積極的な役割を果たしうるのではないかという問題意識が共有されることはなかった。

宗教間対立が深刻な問題を引き起こしてきたアジアであるが、他宗教の共存も経験している。今私たちは、アジアの伝統的な宗教である仏教の歴史と現状から学ぶべきことがあるのではないだろうか。

このような問題意識から、花園大学の佐々木閑教授をお招きし、多様な仏教の存在を可能にしたパラダイム・シフトがアショーカ王の時代に起こったという自説を解説していただいた。同時に、「オウム事件から何を学ぶのか」という副題が示唆するように、現代社会における仏教の自律性について問題提起していただいた。さらに、大谷大学前学長の木村宣彰先生をお招きして、歴史を辿ると、崇仏が必ずしも仏教の興隆を意味せず、逆に排仏が仏教の興隆をもたらした事から、仏教の衰退が囁かれる現代日本の仏教者が学ぶべきことがあるのではないかということを指摘していただいた。以下お二人のご報告を収録した。

お忙しい中、ご協力いただいた両先生には厚く感謝申し上げます。

龍谷大学アジア仏教文化研究センター・センター長
桂　紹隆